
数え女

裏空裏空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数え女

【著者名】

ZZマーク

N9238M

裏空裏空

【あらすじ】

この村には喜助という若い男がいた。またこの村には美しいかや
という若い女がいた……悲劇の末路を辿った『数え女』という怪談
話です。

(前書き)

少しだけですけど、残酷な表現が含まれています。お嫌いな方は読まないでください。

あるところに喜助きすけといつ若い男がいた。歳は18、村のものからよく働いてくれ、親孝行者だと評判もよかつた。喜助には母が一人おり、一緒に小さいながらも家を構えて暮らしていた。

そんな喜助の住む村には絶世の美女ともてはやされている『かや』と呼ばれる女がいた。歳は喜助と同じ18。このかやもよく働くし、よく気が利くと村人から愛されていた。また、両親を早くに病氣で失つており、田畠の管理はすべて彼女がやつていたのである。

そんなかやに喜助は惚れていた。いつかこんな女を嫁にもらいたいものだと常々思つていた。

ある夏の日のことである。喜助はかやの畠の手伝いを頼まれた。もちろんかや本人からである。内心、喜助はめったに無い機会だと心を弾ませていた。

「喜助さん。お休みにならない？ お茶と握り飯を用意したのですけど」

畠仕事も一段落ついたころ、かやは喜助に呼びかけた。

「ああ、助かりますかやさん。後少しだけから、先に行つて食べていてください」

喜助はかやの手料理が食べられるとあつてさうに胸を躍らせるのであった。

しばらくして、喜助は畠仕事を終わらせかやの家にやつてきた。鍬などの道具類は畠において、上半身はこの夏の暑さのせいで裸になつていた。

かやはそんな喜助の姿を見つけると、

「お上がりくださいな」

と、部屋の奥へと案内した。

「では、お邪魔します」

喜助にとつてかやの家へ上garのも初めてであつたので、心は最早踊ると黙つよりも暴れていたのであるが、自分の緊張を見破られては恥ずかしいと思い、平生を装つた。

決して広いとはいえないが、家具などの類のものが恐ろしく少ないからなのであつて、実際より広く感じられたかやの家の居間に、喜助はどかりと腰を下ろした。

「では、いただきます」

「召し上がり」

右手に握り飯、左手に茶をそれぞれ持つ格好で喜助は握り飯を頬張りだした。

「うまいですよかやさん。かやさんが握つた飯はうまい」

喜助は本当にうまいそうに食べていた。しかし、かやを褒めて自分に気持ちを向かせようつとこつ下心も、決して無いわけではなつた。

「あら、喜助さん。お背中が汗で濡れております。お拭きしましょ

う

「か、かやさん!~」

思わぬ言葉に、喜助の心は暴れるを通り越して止まる勢いであつた。

「では、お拭きしますね」

かやは一枚の布切れを持ってきて、喜助の背中にそつとあてた。「なんてたましいお体なのでしょう。働き者のお体ですね」

「あ、ええ、はい……」

喜助は握り飯を食べるこことなど忘れ、背中に伝わってくる布越しのかやの手の温もりを感じつつ、顔を紅く染めていた。

「私、喜助さんのような方にもうつていただきといひござります」

「え!~? こや……」

「すみません。冗談でいひござります。ふふふ、本気にならつたならどうか忘れてください」

喜助は完全に、かやに惚れたのであつた。

それからというもの、喜助は眞面目に働くことをせず、かやのところに入り浸りになつた。喜助の母親もそのことを心配して、毎日出て行く息子を止めるようになつた。

しかし、あんなに大切にしていた母親の必死の制止を、喜助は聞かず、かやのところに行くのを止めなかつた。

ある日の晝のことである。さすがに毎日かやのところに行つていたせいで、喜助の家の畠は荒れ放題になつていた。育てていた植物は皆枯れてしまつてゐたのである。

これはまずいと思い、喜助はその日久しぶりに自分の家の畠に出了。そこへ近所の老人がやつてきてこう言った。

「あのかやのところに行くのはもう止めなさい。この村にはある言い伝えがあつてのう。『数え女』という妖怪の話じゃ。その妖怪の仕業だと思うんじゃが、この村から何人か行方知らずの者が出ておつてな、皆あのかやといつ女の家に通うようになつた男ばかりなのじゃ。」

喜助はこの老人の言つことは、自分を眞面目に働くかせよとしているだけの、自分の恋路を邪魔するものだと思つた。第一、そんな怪談話は聞いたことが無かつたのだつた。だから喜助は、老人の言葉にうなずきはしたもの、まったく聞き入れてはいなかつた。

老人から『数え女』の話を聞いても、もちろん喜助はかやのところに行くのを止めなかつた。それよりも、以前よりまして畠や家のこと気に回さなくなつた。毎日毎日、朝から夕暮れ時まで彼女が「夜までいらしたら、お母様が心配なさるから」と喜助を帰すまで、いつづけた。

ある冬の夕暮れ、このころにはもう喜助は家に帰ることすら惜しむようになつた。かやとずっと一緒にいたい。かやと一時でも長く過ごしたい、そう思うようになつてゐた。だから喜助は、かやが「夜までいらしたら、お母様が心配なさるから」という言葉を聞き入

れず、一人で夜を明かすようになっていた。

「今晚も止まつていかれるの？」

かやは最近、喜助を止めることは止めていた。

「ああ。今晚も止めていただけるかな？」

「喜助さんのお好きな通りに」

喜助はかやの肉体を求めるようになつていた。喜助は上半身裸になり、かやに抱きつくる。

「喜助さん……」

「かや。私はお前が恋しくて恋しくてたまらない。かや、ずっと私がつてくれるか？」

「ええ。でも、喜助さん……だいぶお体の方が衰えてきているのはありますんか？」

「なーに。心配する」とは無いが、お前と過ごしていれば若くなる喜助の体はあの夏の頃と比べれば、筋肉が落ち、まつたくみつともない体つきになつっていた。皮と骨だけのこの歳の男にしては頼りの無い体つきである。

「いけません。私は喜助さんの眞面目に働いた証である立派なお体にも惚れていました。ですが今の喜助さんは、私ばかりにかまけてろくに仕事もしていなではありますんか。それではいけません」「何だ？ 私が嫌いになつたのか？ いけない女だ。お前を私を好く女にしてやろう」

喜助はそう言つと、かやを押し倒した。

「……とうとう、本性を表したな喜助。お前のような男は死んでしまえ」

「かや……？」

喜助は突然かやが物騒なことを言つので、驚き、かやから身を退いた。

「女に溺れ、ろくに仕事もせぬ男よ。女を軽んじるなー！」

「何を言つているのだ、かや……？」

喜助は腰を抜かしてしまい、身動きが取れない。

かやは近くにおいてあつた包丁を手に取ると……

喜助という男の生涯は若い女の一刺しによつてあつけなく終わつた。

この村には50年も前に、かやといつ女がいた。歳は18、村のはずれで細々と父と母の3人で貧乏ながらも幸せに暮らしていた。そんなかやに悲劇が襲つた。この村の近くの森で薪を探していた時のことである。集団でやつてきた男に襲われたのである。その集団で襲つた男は皆、ろくに働きもせず、遊んでばかりいる村の若い男たちであつた。その男はあるうことかかやを襲つた後、体に火をつけたのだった。そのことに村の者は誰も気づいてはいなかつたのだが、それからというもの、森の中でこんな声が聞こえてくるのである。

『1枚、2枚、3枚、4枚、5枚、6枚……』

何かを数える女の声が、森の中から聞こえてくるのであつた……

喜助が死んで少し経つたころ、かやの家からはこんな声が聞こえてきた。

『1枚、2枚、3枚、4枚、5枚、6枚、7枚、8枚、9枚、10枚、11枚……』

その数は、喜助という男のものを合わせるとちょうど20であつた。それは人の皮膚の枚数であり、喜助も他の皮膚の持ち主のよう皮膚を剥がれてしまつたのである。

また、かやの家からはこんな声も聞こえた。
『20も溜まつたか……皮膚のただれが田立つよくなつてきた、そろそろ変え時だな』

喜助を含む他の男の皮膚がかやの皮膚に使われていることは、この村のものは誰も知らない。

(後書き)

いつも、裏空裏空です。今回初めて短編に挑戦してみました。稚拙な文章ですがどうかお付き合いください。感想などいただけたと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9238m/>

数え女

2010年10月8日13時46分発行